

【論説】

## 応用演劇によるホームレス就労自立支援の実践と成果

古賀 弥生・藤本 学

### 要約

ホームレス状態の人々に対する就労自立支援を目的として実施している演劇コミュニケーション講座について、応用演劇の一種であるフォーラムシアターをもとに、「参加者は観劇し、演者（役者）や他の参加者との討論を通して問題場面における適応的なふるまいを考える」という双方向学習手法（ILTAD; Interactive learning through theatergoing and discussions）を考案し導入した。受講者のアンケート調査結果によれば、受講によって不適応を招く思考の癖や知識の欠如を矯正できることがわかった。また心理テストによる4タイプ別の分析では、もともとコミュニケーションが難しいと思われるタイプの人のコミュニケーションに関する意識や意欲が向上し、コミュニケーション能力に関する自己評価も高まったことが明らかになった。

Keyword : フォーラムシアター, ホームレス, 就労自立支援, 職場適応スキル

### 1. はじめに

厚生労働省の「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）」（2018年1月実施）によれば確認されたホームレス数は、4,977人（男性4,607人、女性177人、不明193人）であり、前年度と比べて557人（▲10.1%）減少している<sup>1</sup>。同調査結果ではホームレスの数は年々減少を続けている。これは行政、NPO等による支援策の推進や雇用情勢の変化によるものと思われる。また、同調査では把握しきれない、ネットカフェ等で過ごす生活困窮者が一定数存在するといわれている<sup>2</sup>。そのため生活困窮者に対する支援は依然として重要な社会課題であることに変わりはない。

筆者らは、ホームレス状態から就労自立を目指す人々のための公的施設において、応用演劇の一種であるフォーラムシアターの手法をベースとしたコミュニケーション講座を2014年度から継続実施している。

講座の実施にあたっては、社会心理学的観点から受講生の職場適応能力について検討されている（藤本, 2015）。またトレーニングの効果性検証により、受講者には4タイプがあり社会適応上の問題を抱えるタイプにおいてより高い効果が確認されていることから（藤本, 2016）、

<sup>1</sup> 厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果について」  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_00075.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_00075.html)

<sup>2</sup> 一例として東京都が2018年1月26日に発表した「住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査」の結果によれば、東京都内において、インターネットカフェ・漫画喫茶等の昼夜滞在可能な店舗で寝泊りしながら不安定就労に従事する「住居喪失不安定就労者」等は約3,000人と推計されている。  
<http://www.metro.tokyo.jp/tosei/hodohappyo/press/2018/01/26/14.html>

タイプに応じた研修プログラムの開発に取り組んでいる。このプログラムはシナリオ次第で幅広いコミュニケーションスキルの向上に寄与できるものとして評価されており（藤本，2017），今後，就職活動に踏み出せない学生やニートなどへの活用も期待されている。

現在も講座プログラムは受講生のタイプを考慮に入れるなど改変を続け，今なお開発の途上にあるが，本稿ではその実践状況についてまとめるとともに，現行の2日間での実施プログラムとなった2016年7月から2018年6月まで8クールにわたって実施した講座の受講者アンケート結果を分析し，その成果を明らかにする。

## 2. ホームレスと芸術活動に関わる先行事例及び先行研究

ホームレスの人々と芸術分野に関連する活動としては，英国のストリートワイズ・オペラがよく知られている。ストリートワイズ・オペラはホームレスとプロのアーティストの協働により本格的なオペラ公演を行うほか，音楽ワークショップ等を通じた彼らの自立支援を継続的に行っている団体である<sup>3</sup>。ブリティッシュカウンシルの招きによって同団体の関係者が来日し，日本のホームレス支援団体と連携した活動も実施したことがある。また，同団体の関連団体であるウィズ・ワン・ボイスが制作したガイドブック「ホームレス経験者とのアートプロジェクトに関する評価：ストリートワイズ・オペラのアプローチ」（2017年）には，ホームレスをはじめとする社会的弱者といわれる人々がパフォーマンスアーツに参加することで福祉向上，疎外感の減少，社会参加の向上などポジティブな影響が見られる点に関する研究・調査事例の概要がまとめられている。さらにウィズ・ワン・ボイスのホームページ<sup>4</sup>には，芸術の力でホームレス支援を行う各国の団体等が紹介されており，日本では出版の「ビッグ・イシュー日本」（大阪市），美術等の「KOTOBUKIクリエイティブアクション」（横浜市），ダンスの「ソケリッサ！」（東京都）など8件の活動・団体が掲載されている。

このホームページでは，日本における演劇分野に関わる活動として，大阪市・釜ヶ崎における「NPO法人こえとこころとことばの部屋 cocoroom」の「釜ヶ崎芸術大学」と，福岡市の「NPO法人アートマネジメントセンター福岡」によるホームレス支援施設「抱樸館」での，まわしよみ新聞からの演劇創作ワークショップが紹介されている。アートマネジメントセンター福岡は他のホームレス支援施設における就労自立に向けた演劇コミュニケーション・ワークショップも実施した実績があり，その成果が検証されている（古賀，2015）。

ほかにも演劇活動では，北九州市の「NPO法人抱樸」はホームレス経験者が体験を伝える「生

<sup>3</sup> ストリートワイズ・オペラ <http://www.streetwiseopera.org/> 参照

<sup>4</sup> ウィズ・ワン・ボイス <http://www.with-one-voice.com/> 参照。

笑一座（いきわらいちぎ）の公演活動を行っており<sup>5</sup>、また、東京都の「劇団銅鑼」が就労・就学していない40歳程度までの人を対象とした若者演劇ワークショップを開催<sup>6</sup>するなどの例がある。

以上のようにホームレスの人々に関わる芸術文化活動やニートの若者の演劇活動などの先行事例はいくつかあるものの、ホームレス状態の人々の就労自立を目的とした演劇の手法による活動は、我が国においてまだ数例しか存在しない。本稿で報告する筆者らの実践例はその貴重な一例である。また、成果について社会心理学の見地からの分析を加えるところも筆者らの活動の特徴である。

### 3. 就労自立支援のための演劇コミュニケーション講座 実施の経緯

#### 3.1. フォーラムシアターとは

まず、フォーラムシアターについて整理する。フォーラムシアターはアウグスト・ボアールによって考案された。ボアールは1931年生まれで、ブラジルの政治活動家でもある演出家である。同じブラジルの識字教育で知られるフレイレの影響を受けて社会変革を目指す民衆演劇を展開した。ボアールの活動は、抑圧や差別などの社会問題を演劇的手法によって顕在化・意識化させるものである。ボアールが考案したフォーラムシアターは、参加型の問題解決プログラムとして1970～80年代に日本でも導入された。近年では、学校教育の場においてフォーラムシアターの手法による活動が実施される例も出てきた<sup>7</sup>。

フォーラムシアターは、具体的には以下のようなプロセスで展開される。はじめに観客である参加者が日頃直面する問題に関する短い劇を上演する（参加者自身が作って演じることもある）。次に、どうしたらその問題を解決することができるのかを参加者とともに討論する。そして、討論によって得られた解決策をその場で劇に取り入れ演じ直す（解決策を思いついた時点で手を上げてもらい、そのシーンを提案者に演じてもらうこともある）。以上のプロセスを繰り返すことで、当該問題を解決する最善の方法を参加者全員で見つけ出していく。フォーラムシアターでは、参加者の演劇に関する知識や技術は必要なく、演劇経験の無い人でも自由に参加することができることが特徴のひとつである。

<sup>5</sup> NPO 法人抱樸 <http://www.houboku.net/> 参照。

<sup>6</sup> 劇団銅鑼 <http://www.gekidandora.com/> 参照。

<sup>7</sup> 例を挙げると、企業組合演劇デザインギルドは2000年代初頭から教職員や一般を対象としたフォーラムシアターを実践している。NPO 法人アートイン Asibina には中高生を対象に学校や家庭での問題解決を考える活動等の例があり、Dramatic Delivery Network は学校でメディアリテラシーに関する活動等を行っている。また、教育現場等におけるフォーラムシアターの実践から学術論文としてまとめたものとしては、保育実践の省察にフォーラムシアターを導入した中根（2009）、養護教諭らとの実践活動から理論的定式化をはかった秋葉（2013）、協同教育の側面から考察した三津村、関田（2014）等がある。

しかしながらコミュニケーションに課題を有する人々にとって人前で演じることのハードルは高く、また、問題のある場面に遭遇した際のふるまい方を具体的に考える必要があることから、筆者らはフォーラムシアターをもとに、「参加者は観劇し、演者（役者）や参加者との討論を通して問題場面における適応的なふるまいを考える」という双方向学習手法（ILTAD; Interactive learning through theatergoing and discussions）を考案し講座に導入した<sup>8</sup>。フォーラムシアターでは参加者自身が演じることもその要素のひとつに挙げられるが、ILTADでは集団討論をより重視し、参加者が自ら演じることよりも役者の演技を観てその言動をどう修正するか、俯瞰した視点から考察することになる。また、特に主人公の振る舞いに意識を集中して観ることを促すことで、作中の問題行動を主体的に認識させるなどトレーニングとしての性質を有する点がILTADの特徴である。実施内容の詳細は後述する。

### 3.2. 実施に至る経緯

#### 3.2.1. ホームレス支援のための自立支援センターについて

現在、生活困窮者支援法に基づき行政施策の一環として、住居のない生活困窮者で所得が一定水準以下の人々に原則3か月（最大で6か月）に限り宿泊場所と衣食を供与する自立支援センターが設置されている。同センターでは就労準備支援事業や就労訓練事業も合わせて実施される場合がある<sup>9</sup>。

同センター入所者は、いわゆる路上生活を経験しているとは限らず、職や住居を失って生活に困窮した状態から行政、NPO等の相談窓口に自ら相談に訪れた人もいる。センター入所にあたってはアセスメントが行われており、就労自立が可能（部分的な福祉的自立も含む）と判断された、就労の能力と意欲を有する原則として60歳以下の人々が入所している。これらの人々が最長6か月の期間、センターで集団生活を送りながら就労に向けた準備を行っている。

#### 3.2.2. 演劇コミュニケーション講座の実施まで

これらの中の1施設（以下、センターと表記）でフォーラムシアターをベースとした双方向学習手法ILTADによる演劇コミュニケーション講座が2014年度から実施されている。センター長及び入所者への事前の聞き取り調査によれば、センターにはコミュニケーションに課題があるために就労に至らない入所者が少なからず存在しており、中には一度就労しても職場で対人トラブルを引き起こし、すぐに辞めて再入所という経過をたどる人もいる。そこで、センターでは彼らのコミュニケーションに関する課題を改善するべく演劇の手法による講座が開始され、一般的な演劇ワークショップによる講座を約3年間にわたり実施した後、2014年7月

<sup>8</sup> 藤本学（2017）「観劇と議論を通じた双方向学習によるホームレスの社会適応スキルの改善」『日本社会心理学会第58回大会発表論文集』, 173（ポスター発表214）参照。

<sup>9</sup> 厚生労働省「生活困窮者支援制度概要」  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000059382.html> 参照。

からILTADによるコミュニケーション講座を実施することとなった。

導入にあたってはフォーラムシアターについて豊富な経験を持つ演劇人のチームであるDramatic Delivery Network<sup>10</sup>（以下、DDN）に依頼し、センター入所者へのヒアリング等から把握した、彼らの多くが抱える課題を描いた5分程度の劇作品を創作した。筆者らはコーディネーターとして自立支援センターとDDNの間で調整を行い、毎回の講座には記録者として立ち会っており、質問紙やインタビューを用いた効果性の検証も行っている。

#### 4. 実践内容

センターで実施してきたコミュニケーション講座は、以下のような変遷を経ている（表1）。なお、第1期から第4期までの講座の実施にあたってはDDNのメンバー4名がファシリテーターと演者を務めている。

2014年7月から2015年8月までに実施した4クールは1日約2時間の講座を4日間、2015年9月以降は1日2時間、2日間の講座となっている。

当初4クールのプログラムは以下のとおりであった。

##### ① 第1期 第1～第4クール（2014年7月～2015年8月）

《各回の内容》\*各回120分

- (i) フォーラムシアター：コンビニ店員編
- (ii) コミュニケーション・ワークショップ
- (iii) 日常のコミュニケーションで困ったことを演じる
- (iv) (iii)の解決編創作

(i)の「コンビニ店員編」は、コンビニのバックヤードを舞台に「シフトを無視して身勝手な理由で帰ってしまった同僚の代わりに退勤時間後も続けて勤務することを店長に求められた

表1 演劇コミュニケーション講座の変遷

期	期間	内容
第1期	第1～第4クール (2014年7月～2015年8月)	①フォーラムシアター：コンビニ店員編 ②コミュニケーション・ワークショップ ③日常のコミュニケーションで困ったことを演じる ④③の解決編創作
第2期	第5～第6クール (2015年9月～12月)	①コミュニケーション・ワークショップ ②フォーラムシアター：コンビニ店員編
第3期	第7～第10クール (2016年7月～2017年2月)	①フォーラムシアター：責任編 ②フォーラムシアター：メモ編
第4期	第11クール～ (2017年11月～)	①フォーラムシアター：責任編 ②フォーラムシアター：商品編

<sup>10</sup> Dramatic Delivery Network について <http://ohnekoza.catfood.jp/ddn/index.html> 参照。



主人公が、デートの約束をしていた恋人に強い態度で遅れないように求められ、どうしたらいいのか困ってしまい…」という状況を描き、誰のどの言動をどのように修正すればこの場がうまくいくのかを考える内容であった。

この4日間のプログラムを4クール実施したものの、他の研修や通院などの都合から4日継続して参加する入所者を確保することは難しく、2日間の短期プログラムに改変した(第2期)。改変後は前述の4日バージョンのプログラムのうち後半2日の内容を割愛し前半2日の内容を入れ替えている。この改変により参加者の顔ぶれの確定や人数の確保に一定の成果が得られた。

#### ② 第2期 第5～第6クール(2015年9月～同年12月)

《各回の内容》\*各回120分

- (i) コミュニケーション・ワークショップ
- (ii) フォーラムシアター：コンビニ店員編

2日バージョンに改変した後も実施内容は2度修正している。これは社会心理学の見地からの成果検証をふまえ、シナリオの変更等を行ったものである。第3期は、職場適応に必要な能力として社交力・機転力・不当受容力・不正受容力が特定されたことを受けて(藤本, 2015), この4つの力に照準を当てている。

#### ③ 第3期 第7～第10クール(2016年7月～2017年2月)

《各回の内容》\*各回120分

- (i) フォーラムシアター：責任編
- (ii) フォーラムシアター：メモ編

「責任編」のストーリーは「商品の出荷準備に追われる倉庫内。同僚とペアで作業する主人公のところに上司が急な残業を依頼しに来る。主人公は定時に帰りたいと思っているが、同僚は引き受けてしまう。上司が去った後、引き受けたからにはきちんと仕事をしたいけれど定時で帰るのが当然と考える主人公と、気安く残業を引き受けた同僚との間が気まずくなって…」というものであった。

一方「メモ編」は、「同じく商品の出荷準備を行う倉庫内で、新人である主人公が先輩に仕事を教えてもらっている。先輩Aはしっかりメモを取るよう注意し、先輩Bは時間がもったいないのでBのやり方を見て覚えるように、と言う。指導方法の違う2人にはさまれて、ちょっとキレてしまう主人公…」という内容であった。

#### ④ 第4期 第11クール(2017年11月)以降

- (i) フォーラムシアター：責任編
- (ii) フォーラムシアター：商品編

第3期の実施後、効果性を検証したところ(藤本, 2017), 機転力に関する効果を補強する

必要が確認されたため、2日目のシナリオをさらに改変し、新たに「商品編」を実施することとなった。「商品編」は「事務室内でネジの在庫を数えている主人公。後輩社員がやってきて同僚の愚痴を言い始める。あまり相手をしたくない主人公はやんわりと断るが、部屋を出ようとした後輩が持ち込み禁止の腕時計をしていることを見とがめる。そこに入ってきた上司が話題に出ていた同僚が商品を持ち出そうとして退勤時の検査に引っかかった、という。同僚の日頃の様子を尋ねる上司に後輩が『自分より先輩のほうが親しかった』と告げ口のようなことを言い、その上持ち出し禁止の書類を家に持ち帰って仕事をしていたことがバレてしまい、あらぬ疑いをかけられそうな状況に…」というストーリーであった。

受講者は、それぞれのストーリーを役者が演じる様子を観て、主人公の視点から問題解決に向けた改善策を考えることを通じ、自らのコミュニケーションのあり方を振り返ることとなる。

## 5. 受講者アンケートによる成果検証

本講座の成果検証については、全日程を終了した直後に受講者を対象としたアンケート調査と約1週間後のヒアリング調査を実施しており、ほかにセンター入所時と講座終了1週間後の質問紙調査も実施している。本稿では受講直後のアンケート調査の結果を分析する（図1）。

### 5.1. アンケート調査の概要

講座の全日程を終了した直後に行うアンケート調査は、講座受講が「自身のコミュニケーションに関する意識や態度、能力に影響を与えたと思うか」などについて尋ねる内容である。同じ質問紙を用いて上述の第1期から第4期まで実施しているが、本稿では実施日程が2日間となりプログラムが類似する第3期（2016年7月～2017年2月）と第4期（2017年11月～2018年6月）の受講者でアンケートへの回答が得られた85人分（男性84人、女性1人）の調査結果をもとに分析する。

図1 講座実施と調査の流れ

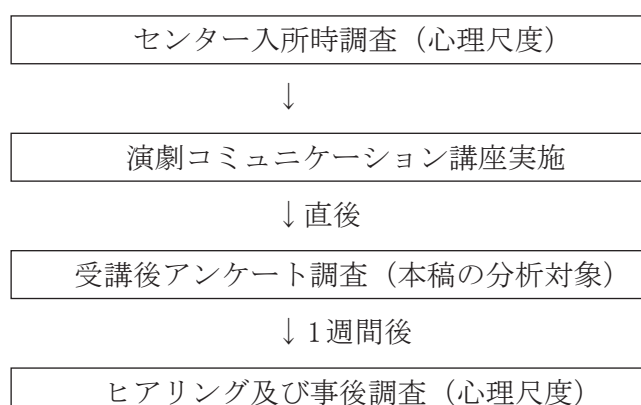


表2 演劇コミュニケーション講座受講者の属性(年齢別)

年齢	人数(人)
20歳代	15
30歳代	20
40歳代	23
50歳代	21
60歳代	5
不明	1
合計	85

注：年齢は原則として入所時点

表2はアンケート回答者の属性である。

(アンケート調査内容)

1. この講座を受ける前と比べて、他者とのコミュニケーションについての意識や考え方が変わったと思いますか？(回答は「とても思う」から「まったく思わない」までの7件法＋自由にコメントを記入)
2. この講座を受ける前と比べて、他者とのコミュニケーションを、積極的にしていこうと思いますか？(同上)
3. この講座を受ける前と比べて、他者とのコミュニケーションを、うまくできるようになったと思いますか？(同上)
4. 最初に参加する前の気持ちに近いのはどれですか？(複数回答)
  - ・楽しそう・役に立ちそう・興味がある・楽しくなさそう
  - ・役に立たないのではないか・やりたくない・その他(自由記述)
5. 参加したあとの気持ちに近いのはどれですか？(複数回答)
  - ・楽しかった・コミュニケーション力が伸びたと思う・就職の役に立ちそう
  - ・今後の生活で役に立ちそう・参加した皆とより仲良くなれた・楽しくなかった
  - ・難しかった・役に立たなかった・皆と一緒にやるのが苦痛だった
  - ・その他(自由記述)
6. 支援センターを出た後もこの講座に参加する機会があったら参加したいですか？(参加したい・参加したくない の2択)
7. 学校や職場などで、このような講座をする機会があったほうが良いと思いますか？(あったほうが良い・ないほうが良い の2択)
 

→7で「あったほうが良い」と回答した場合、どの場所が良いですか？

  - ・小学校・中学校・高校・職場・町内会等の地域・その他(自由記述)
8. 講座を受けた感想(自由記述)



## 5.2. アンケート調査結果

### 5.2.1. コミュニケーションに関する意識の変化

「コミュニケーションに関する意識・考え方が変化したと思うか」については、肯定的な回答（「とても思う」「思う」「少し思う」）が51人（回答総数に占める割合60.0%）と6割を占めた。「コミュニケーションを積極的にしていこうと思うか」という問いに対しても同様に52人（同61.2%）、「コミュニケーションをうまくできるようになったと思うか」という問いには「わからない」という回答が34人（同40.0%）でもっとも多かったが、肯定的回答（31人、36.5%）が否定的回答（「思わない」「あまり思わない」「全く思わない」）（20人、23.5%）を上回った（図2）。

### 5.2.2. 受講する前後の気持ちの変化

受講前は「やりたくない」24人（回答総数85人に占める割合28.2%）、「興味がある」20人（同23.5%）、「役に立ちそう」16人（同18.8%）、「役に立たないのではないか」14人（同16.5%）と肯定・否定が拮抗する状況であった（図3）が、受講後は「楽しかった」29人（同34.1%）、「今後の生活で役立ちそう」26人（同30.6%）、「就職の役に立ちそう」16人（同

図2 受講前後のコミュニケーションに関する意識の変化

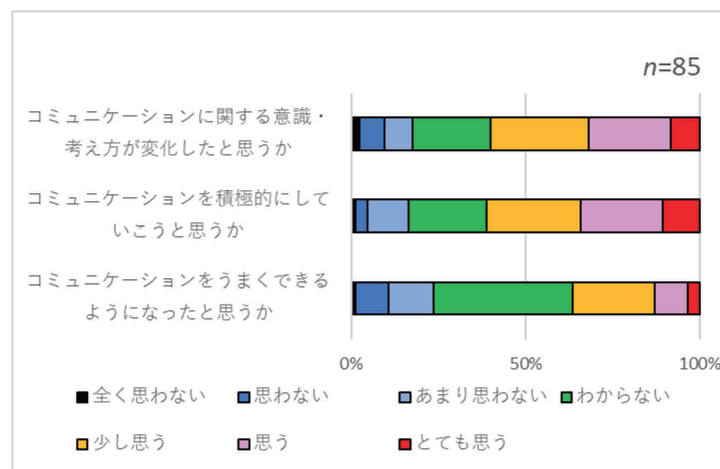


図3 受講前の気持ち（複数回答 単位：人）

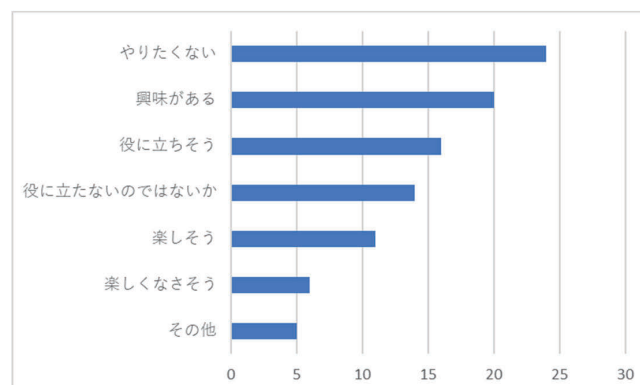


図4 受講後の気持ち(複数回答 単位：人)

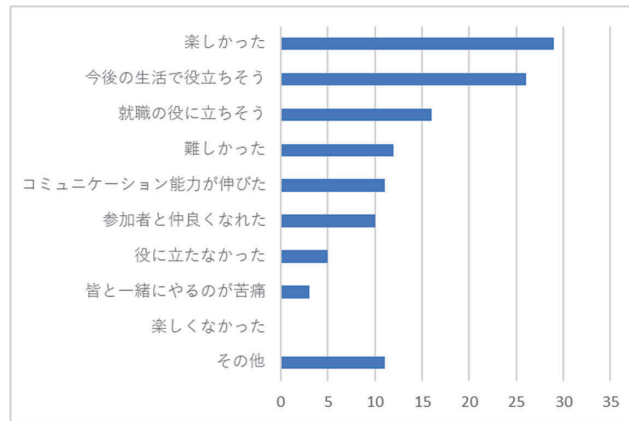
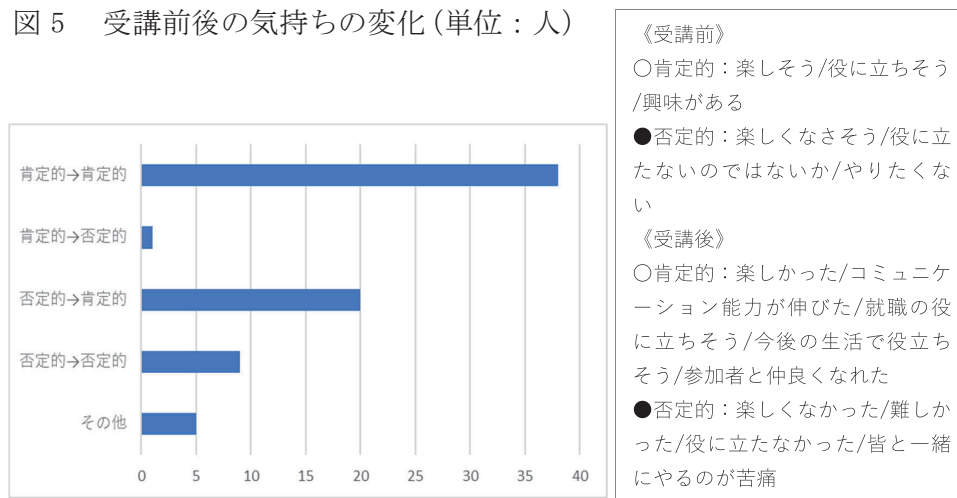


図5 受講前後の気持ちの変化(単位：人)



18.8%)と肯定的な意見が上位を占めた(図4)。

また、受講前後の気持ちの変化を「肯定的→肯定的」「肯定的→否定的」「否定的→肯定的」「否定的→否定的」に分類してみると、否定的な気持ちから肯定的に変化した人が20人(受講前後の両方を回答した73人に占める割合27.3%)おり、受講前から肯定的に捉え受講後も肯定的に感じている38人(同52.1%)と合わせると8割がこの講座を前向きに受け止めたことがわかる(図5)。なお肯定的な気持ちから否定的に転じたのは1人(同1.4%)、受講前も受講後も否定的な気持ちであったのは9人(同12.3%)であった。

### 5.2.3. 今後の参加意向等

「支援センター退所後もこの講座に参加する機会があったら参加したいか」という問いへの答えは、「参加したい」38人(回答者82人に占める割合46.3%)、「参加したくない」44人(同53.7%)であった(図6)。しかし、「学校や職場などでこのような講座をする機会があったほうがよいと思うか」という問いには72人(同87.8%)が「あったほうがよい」と答えている(図7)。受講者は、自分自身は参加しないとしても講座実施の意義は認めているものと思われ

図6 退所後に参加機会があった場合の参加意向

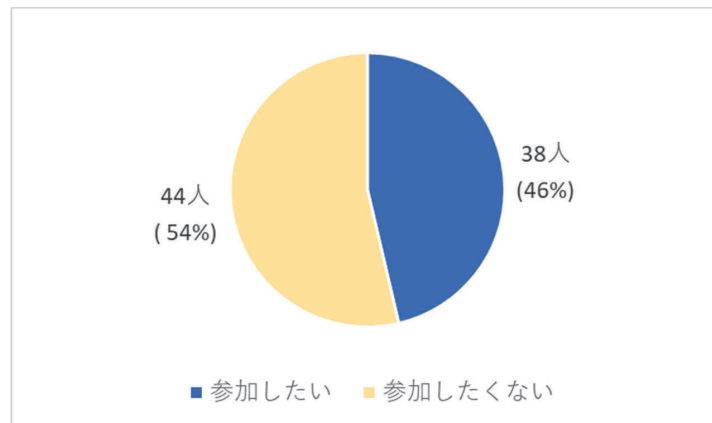
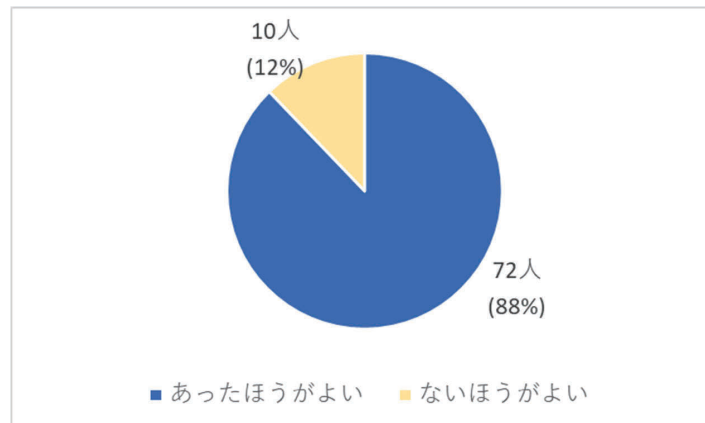


図7 学校や職場などで参加する機会があったほうがよいか



る。

また、学校・職場などで参加する機会があったほうがよいと回答した72人に「どんなところで実施すると良いか」を尋ねたところ、もっとも多かったのは「職場」という回答で43人（回答者72人中59.7%）を占めた（図8）。高校生以下の子どもを対象とするとよいという回答も多いが、「町内会等地域」を選択したものも含め主に大人を対象とした内容のプログラムであると受け止められていることがわかる。「その他」としては「就労自立支援センター」「刑務所」「大学」などが具体的に記載された。

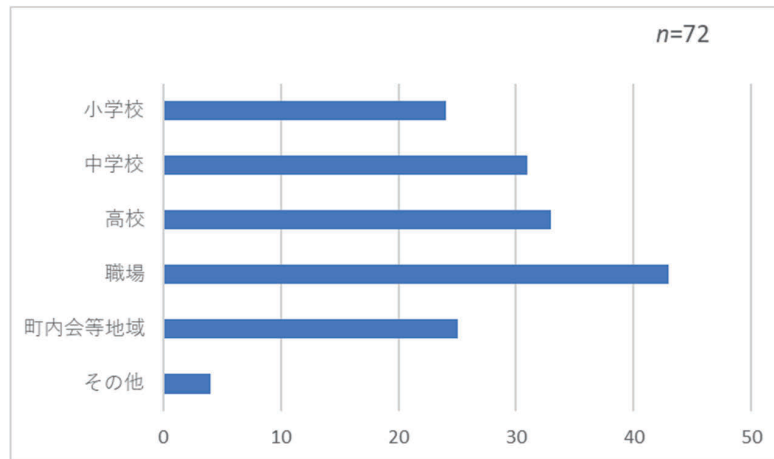
#### 5.2.4. 自由記述の内容

自由に感想を記入する欄になんらかのコメントを記載したのは47人（回答総数85人中55.3%）であった。

記載されたコメントから「楽しかった」「役に立った」など上述の設問と重なる内容のものは省き、以下に列記する（明らかな記載ミスと思われるものは補記している）。

内容によって分類すると、受講を契機とした自分自身の変化やその可能性に触れたもの、フォーラムシアター（演劇の手法を応用した講座）に対して、これまでに経験のない講座の手

図8 参加する機会があったらよいと思う場所について(複数回答 単位:人)



法であることを肯定的に評価したもの、一方で講座の進行方法等に自分なりの改善意見等を述べたものが見られる。

【自身の変化に関連するコメント】(○肯定的 ●否定的 △中立的に分類。以下同じ)

○自分は今まで会社勤めをしていましたが、回りの人に比べるとコミュニケーション能力が衰えていると感じていて、今回講座を受けて少し自信が以前よりはよくなる気がしました。

○過去の自分にもものすごくあてはまる内容でしたので、とても勉強になりました。生活のなかでは客観的に見る・考えることがないので演劇を通して確認できたのは今後必ず生きてくるのを確信します。ありがとうございました。

○いろいろな人たちとコミュニケーションを考える時間は大切だと思いました。

○職場に入る人や就活生たちには考えさせるものが多いのですごく勉強になると思う。自分自身役に立った。

○言葉を考えないといけないと思った。とても考えさせられた。

○人間関係が大切なんだなと思った。おもしろかった。

○人と人との問題だから1つ1つ解決すればいい。

○社会に出てもコミュニケーションを大事にしていきたいです。

○思考が広がったと思う。

○話し方や聞き方が下手だったのですが、少しくまくなったように思う。

●今までの自分を変えるのは難しいかな。

△自分次第

△講座後、あまり人と接していないのでわからない。

【講座の手法に関連するコメント】

- 日頃表に出さないような意思・意見を楽しみながら出せる場としては非常に有効な講座だと思います。
- 本当にリアルだったので驚きました（実際にある出来事）。
- 最初は軽く見ていたが、なかなか感慨深いものがあった。
- 初めて体験する講座で即興芝居的でおもしろかった（TVの“スジなし”みたい）。逆にキャラクターの設定を先にこちらからしたかった。
- 実際に職場で起こりうる問題をテーマにしているとても参考になりました。この活動が世の中に広がるといいと思います。
- 演劇が好きだったためとても楽しく、時に本当にこの場にいるような気持になるほどでした。本当にありがとうございました。
- 知らない世界を知れてよかった。
- 実際に起こりうる芝居だったんで…。役者さんはうまいと思います。
- 今までにない独特な講座だと思いました。

【講座の進行に関連するコメント】

- 今回あまり意見を出すことができませんでした。
- 話を組み立てていくのとキャラが変わるところが微妙に難しいのではとってしまう。
- △初日は難しく理解しづらかったけど、2日目は集中して拝見できたので問題について考えることができた。
- △最初の時点でグループを組み話し合いのうえで意見を出した方がスムーズに進むのかなと思いました。

【その他】

- 役者さんの演技も素晴らしかったです。これから応援します。がんばってください！
- 素晴らしい演劇をしてくださり、ありがとうございました。今後もまた機会があればよろしくをお願いします。

#### 5.2.5. アンケート調査結果小括

ここまでアンケート調査結果について述べたことを以下にまとめる。

まず、受講者のコミュニケーションに関する意識は肯定的に変化しており、コミュニケーションを積極的にしていこうという意欲を高めることにも成功しているといえよう。

また、講座について受講前から肯定的に受け止める、あるいは受講前は否定的であったが受講後に肯定的な受け止め方に変化する受講者が多く、演劇を活用した手法が「楽しい」と感じられていることが自由記述のコメントからも読み取れる。



さらに、センター退所後にこの講座を受講する機会があったとした場合、自分は受講したいとは思わないが、職場や学校などでは実施されるとよいと考えられており、講座実施の意義があると認められている。

本講座で導入したILTADは認知の変容を目指す手法であり（藤本，2017）、受講によって不適応を招く思考の癖や知識の欠如を矯正することに成功しているといえる。また、講座実施の1週間後に行った心理テストの結果でも自己の職場適応の能力について受講前よりも高く評価していたことから、トレーニングの効果は一過性のものではないことが分かる（藤本，2017）。ただし、意識や意欲、コミュニケーション能力を改善する効果は明らかなものの、実際に行動の変化に影響を及ぼすことができたかどうかは未知数である。本来であれば、この点はセンター退所後、就労や日常生活の場で測定する必要があるが、退所後にセンターと連絡を取り続ける入所者は稀であり追跡調査は困難な状況である。

## 6. コミュニケーション・タイプによる分析

上述のアンケート調査のうち「コミュニケーションに関する意識の変化」に関わる設問の回答を、心理尺度（藤本，2016）による類型にあてはめ分析を試みる。

ここでいう類型は、内閉的傾向（社交性や推察力の欠如）の高低と理不尽受容力の高低の組み合わせによって受講者を分類したもので、以下の4つのコミュニケーション・タイプを指す。

- ・ 適応型：内閉的傾向は低く、理不尽受容力は高い
- ・ 正道型：内閉的傾向は低く、理不尽受容力は低い
- ・ 受容型：内閉的傾向は高く、理不尽受容力は高い
- ・ 憤慨型：内閉的傾向が高く、理不尽受容力は低い

一般的に適応型は内閉的傾向が低く理不尽な状況をうまく受け流すことができるため、コミュニケーションの場面で問題を感じることはあまりないと考えられる。また、正道型はあまり内閉的ではないものの曲がったことを受け入れられず理不尽だと感じる場面では我慢をせずに行動しがちである。一方、受容型はやや内閉的だが、理不尽な状況でも受け入れることができる。そして憤慨型は人づきあいを好んで行うことはしないタイプといえよう。4タイプのうち、コミュニケーション講座の効果が出づらいと推測されるのは憤慨型である。内閉的で理不尽な状況を我慢しないタイプであるため、他者から変容を求められても聞き入れる可能性は低いと推測される。

本稿の分析対象であるアンケート調査回答者85人のタイプ別内訳は適応型19人（22.4%）、正道型5人（5.9%）、受容型36人（42.4%）、憤慨型24人（28.2%）、不明1人（1.2%）であった。

表3 コミュニケーションに関する意識・考え方の変化(4タイプ別) n=84

タイプ	全く思わない	思わない	あまり思わない	よくわからない	少し思う	思う	とても思う	平均値
適応型	1	0	1	2	6	7	2	5.16
正道型	0	1	1	0	2	1	0	4.20
受容型	1	4	4	8	11	6	2	4.39
憤慨型	0	1	1	9	4	6	3	4.92

表4 コミュニケーションに関する意欲の変化(4タイプ別) n=84

タイプ	全く思わない	思わない	あまり思わない	よくわからない	少し思う	思う	とても思う	平均値
適応型	0	0	1	2	8	3	5	5.47
正道型	0	0	0	2	2	1	0	4.80
受容型	1	3	3	10	9	7	3	4.56
憤慨型	0	0	5	6	3	9	1	4.79

表5 コミュニケーション能力に関する変化(4タイプ別) n=84

タイプ	全く思わない	思わない	あまり思わない	よくわからない	少し思う	思う	とても思う	平均値
適応型	0	0	1	10	5	1	2	4.63
正道型	0	1	2	1	0	1	0	3.60
受容型	1	6	6	12	7	3	1	3.86
憤慨型	0	1	2	11	7	3	0	4.38

表2～4 共通注：設問はそれぞれの項目について「変化したと思うか」を問うている。

回答数の単位は人。平均値は「全く思わない」1～「とても思う」7として加重平均を算出。

受講後のコミュニケーションに関する意識等の変化をこの4タイプごとに表したのが表3～5である。

タイプ別の比較では、4タイプの中でもっとも変化を期待できないと思われた憤慨型がむしろ肯定的な回答をしていることに注目したい。サンプル数が5件と少ない正道型を除くと、コミュニケーションに関する意識・考え方、意欲、能力のいずれについても、憤慨型が適応型に次いで平均値が高くなっており、講座によるプラスの変化が見られる。一般的には気難しく周囲とのコミュニケーションの回路を断っているかのように見える憤慨型の受講者に変化をもたらす可能性が示されており、この結果は心理テストによる効果性の検証(藤本, 2016)とも一致している。

効果が出づらいと予想された憤慨型受講者のコミュニケーションに関する意識や意欲が向上し、コミュニケーション能力に関する自己評価も高まったことから、ILTADがコミュニケーション力に問題のない人々をより高い次元に押し上げるというよりも、課題を抱えた人々のコミュニケーション力を標準的な水準にする「リメディアル効果」を持っていることが明らかになった。演劇によって視覚に訴えるわかりやすい手法であるILTADが「この場面で自分ならどう振る舞うか」と想像力を働かせる機会となったことが、日ごろは他者と交流することを避け自分の世界に没入する傾向がある人々にプラスの刺激を与えるものと考えられる。また、日

常的なコミュニケーションの機会が少ない中、講座では他の受講者と意見を出し合う集団討論を重視しているため、コミュニケーションに自信を持つ契機となった可能性が指摘できる。このことから、コミュニケーションに関する行動を改善する前提として必要な意識の変化や自信を得ることについて、演劇を応用した手法であるILTADの有用性が示唆されているといえよう。このことについては、アンケート調査とは別に実施した受講1週間後のヒアリング調査の分析結果とも合わせ、今後の課題としてさらに詳細に解明したい。

## 7. おわりに

演劇コミュニケーション講座の実践は、ホームレス状態にある人々の就労自立の一助とするためコミュニケーションのあり方を考える場を創出することを目的としている。ホームレス状態に至った人々の中には、いったん就労しても長続きせず不定就労の状態である人も多い。その背景にコミュニケーションの問題があり、就労後の職場や日常生活における人間関係を円滑に保つ必要なスキルを得る契機が必要とされている<sup>11</sup>。ILTSDでコミュニケーションのあり方を考える習慣と正しい行動の知識を身につけることで、その契機を得ることにつながる可能性がある。適切なプログラムを開発し成果を可視化することができれば、ILTADによる演劇コミュニケーション講座はホームレスに限らずさまざまな事情で生きづらさを感じる人々を社会とつなぐ、社会包摂的な活動であるといえる。

こうした実践とその成果検証の活動を今後も重ねることで、コミュニケーション・タイプに応じたより効果性の高いプログラムの開発につなげていきたい。

## 謝辞

本稿で報告した実践活動と研究にはNPO法人福岡すまいの会様に多大なるご協力をいただいたことを深く感謝いたします。

\*本稿は科学研究費（挑戦的萌芽研究〈基〉26590138 研究代表者・藤本学）「応用演劇に基づくホームレスの就労自立支援に関する社会心理学的研究」及び（基盤研究(C)17K04331 研究代表者・藤本学）「不定就労者の就労自立支援に向けたPBL型ソーシャルスキルトレーニングの開発と普及」の研究成果の一部である。

<sup>11</sup> このことに関連して吐師（2017）は「制度や政策の拡充をすすめることだけで『ホームレス』という状況にある人の生活改善がなされるわけではない。（中略）制度や施策で住居や収入を得て『ホームレス』という状況を脱したとしても、その生活の維持には誰かとのコミュニケーションが必要不可欠である」（p66）と述べている。

## 参考文献

- Augusto Boal (1975). *Teatro Oprimido*, Buenos Aires (里見実, 佐伯隆幸, 三橋修訳『被抑圧者の演劇』晶文社, 1984年).
- Paulo Regulus Neves Freire (2005). *Pedagogia do Oprimido*, Paz e Terra (三砂ちづる訳『新約 被抑圧者の教育学』亜紀書房, 2011年).
- Helen Nicholson (2005). *Applied Drama : The Gift of Theatre*, Palgrave Macmillan Publishers (中山夏織訳『応用ドラマ ～演劇の贈りもの～』而立書房, 2015年).
- 秋葉昌樹 (2013)「臨床教育研究としてのフォーラムシアター—社会学的考察の試み—」『教育社会学研究』第92集, 83-104.
- 藤本学 (2015)「社会に適応するために必要なSWITCH—ホームレスの実体験に基づく社会的スキル尺度の開発—」『日本パーソナリティ心理学会発表論文集』24, 78 (PC18).
- 藤本学 (2016)「フォーラムシアターによる不定就労者のスキルトレーニングの効果性の検証—自閉症傾向と理不尽受容スキルに基づく分類—」『日本パーソナリティ心理学会発表論文集』25, 73 (PD02).
- 藤本学 (2017)「観劇と議論を通じた双方向学習によるホームレスの社会適応スキルの改善」『日本社会心理学会第58回大会発表論文集』, 173 (ポスター発表214).
- 吐師秀典 (2017)「『ホームレス』という状況にある人とのコミュニケーション」『こころの科学』通巻(191), 64-70, 日本評論社.
- 古賀弥生 (2014)「演劇によるホームレスの就労自立支援について」『第16回日本アートマネジメント学会全国大会&公開シンポジウム予稿集』, 24-25.
- 古賀弥生 (2015)「演劇によるホームレスのためのコミュニケーション講座の実践と検証」『活水論文集』第58集, 123-147, 活水女子大学文学部.
- 古賀弥生, 藤本学 (2017)「応用演劇の手法による就労自立支援プログラム開発の成果と課題」『日本アートマネジメント学会第19回全国大会<奈良>予稿集』, 32-35.
- 古賀弥生 (2018)「フォーラムシアターの応用によるホームレス就労自立支援の実践について」『演劇教育研究』(7), 日本演劇学会演劇と教育研究会.
- 三津村正和, 関田一彦 (2014)「協同教育から見たフォーラムシアター」『創価大学教育学論集』(65), 111-124.
- 中根真 (2009)「フォーラム・シアター (Forum Theatre) を用いた保育実践の省察」『保育学研究』47 (1), 55-65.
- ウィズ・ワン・ボイス (2017)「ホームレス経験者とのアートプロジェクトに関する評価: ストリートワイズ・オペラのアプローチ」(日本語版).